

二宮金次郎が遺した 経営者への メッセージ

のまき



中小企業診断士
馬渕智幸 氏
●プロフィール(マブチトモヨキ)
中小企業診断士
MBA(経営学修士)
「税理士法人NEXT」勤務
事業承継・ブロックコードィネーター
中部東海第1号認定支援機関として
経営改善支援等を行なながら、販路
開拓や事業承継など中小企業のあら
ゆる問題解決に注力している。



前月号(その壱)

1. 少年期の金次郎
2. 積小為大
3. 心田開発(意識改革)
4. 金次郎の仕法
5. 分度と経営計画
6. 推譲と企業の使命

様に規模は小さいが疑似繁華街が出現し、耕す土地が目の前にあつても耕作しない状況となつていた。

金次郎は、「改革を行うには、改革の対象となる人々が、改革者の姿勢を見て心を改革するよう仕向けなければならない」という考え方のもと、財産をすべて売り払って、桜町の再興資金に充て骨を埋める覚悟で再興に取り組んだ。

仕法の基本は、報徳・勤労・分度・推譲の四つであった。

報徳とは、働くことに対する人生観のことである。天地人三才の恩徳によって生かされてい

小田原藩主大久保忠真に見出され、分家宇津家の下野国桜町領の再興事業を開始したのは、金次郎が三十六歳の時であった。そのころ都市部では欲望の赴くままに刹那的な快楽を得る繁華街が出現していた。桜町でも同

るという自覚があれば、恩徳へ恩返しに働くことが当然となる。

勤労とは、天地人から受け取る無限の恩徳に対して、力の限り返そうとする情熱を持った働くことである。

分度とは、過剰な消費行動を是とするのではなく、生活の分を守る計画的な消費を進めるこ

とである。

推譲とは、分度して余剰が出たらその多少にかかわらず他人に譲ることである。

四つの仕法を同時進行で行っていたものの金次郎の桜町再興の最初の三年は準備に忙殺され、

その後の四年は二宮仕法に反対する者への対応にほとんどの時間を費やした。つまり荒れてしまった人の心田開発(意識改革)には多大な労力と時間がかかったということである。

四つの仕法の中でも分度は企業経営に通じるものがある。

金次郎は、桜町再興の分度のために十分な実地調査を行つた。領内の一戸一戸を訪問し、百八十年前にまでさかのぼつて土地の収穫高と年貢高を細かく調査したのだ。このような調査に基づいて分度し再興を行つた。桜町の分度のみならず、各農家や各商家に対しても同様に分度の重要性を説いた。

「(前略)銘々が自分の家の権量を謹み、法度を定めることができた。これが道徳経済のもと定め、商家ならば前年の売徳金を調べて本年の分限の予算を立

てる。これが自分の家の権量、おのが家の法度である。これを定めて、これを慎んで超えないのが家をとのえるもとだ。家に権量なく法度なくて、どうして永続できようか。」

分度は企業経営でいう経営計画である。売上計画に見合つた経費計画を作成し、それに基づいて実行する。分度なくして再興は図れなかつたであろう。

金次郎は、さまざまな困難を乗り越えながら十年という長い年月をかけて、桜町の再興を果たした。その成果として収穫高の増加と人口の増加、貯蔵米の増加があげられる。再興が終了した二年後と五年後に歴史的な凶作に襲われたものの桜町は住民に救済米を割り当てる事ができた。

「譲は人道だ。(中略)今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に譲り、そのうえ子孫に譲り、他人に譲るという道がある。雇人となつて給金を取り、その半

年であります。
* 史実は諸説があります。本文とは異なる説もあります。
* イメージはイメージです。

なるば家株田畠、何町何反歩、この作徳何十円と調べて分限を立てる。家々の権量とは、農家肝要だ。これが道徳経済のもと定め、商家ならば前年の売徳金を調べて本年の分限の予算を立

5 積小為大

金次郎の仕法は、報徳・勤労・分度・推譲の四つである。

金次郎は、桜町再興の分度のために十分な実地調査を行つた。領内の一戸一戸を訪問し、百八十年前にまでさかのぼつて土地の収穫高と年貢高を細かく調査したのだ。このような調査に基づいて分度し再興を行つた。桜町の分度のみならず、各農家や各商家に対しても同様に分度の重要性を説いた。

「(前略)銘々が自分の家の権量を謹み、法度を定めることができた。これが道徳経済のもと定め、商家ならば前年の売徳金を調べて本年の分限の予算を立

てる。これが自分の家の権量、おのが家の法度である。これを定めて、これを慎んで超えないのが家をとのえるもとだ。家に権量なく法度なくて、どうして永続できようか。」

分度は企業経営でいう経営計画である。売上計画に見合つた経費計画を作成し、それに基づいて実行する。分度なくして再興は図れなかつたであろう。

金次郎は、さまざまな困難を乗り越えながら十年という長い年月をかけて、桜町の再興を果たした。その成果として収穫高の増加と人口の増加、貯蔵米の増加があげられる。再興が終了した二年後と五年後に歴史的な凶作に襲われたものの桜町は住民に救済米を割り当てる事ができた。

「譲は人道だ。(中略)今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に譲り、そのうえ子孫に譲り、他人に譲るという道がある。雇

勤労とは、天地人から受け取る無限の恩徳に対して、力の限り返そうとする情熱を持った働くことである。

分度とは、過剰な消費行動を是とするのではなく、生活の分を守る計画的な消費を進めるこ

とである。

推譲とは、分度して余剰が出たらその多少にかかわらず他人に譲ることである。

四つの仕法を同時進行で行つていたものの金次郎の桜町再興の最初の三年は準備に忙殺され、

そのころ都市部では欲望の赴くままに刹那的な快楽を得る繁華街が出現していた。桜町でも同

頃の再興事業を開始したのは、

金次郎が三十六歳の時であった。そのころ都市部では欲望の赴くままで利那的な快楽を得る繁華街が出現していた。桜町でも同

頃の再興事業を開始したのは、金次郎が三十六歳の時であった。そのころ都市部では欲望の赴くままで利那的な快楽を得る繁華街が出現していた。桜町でも同

頃の再興事業を開始したのは、